

## 第 14 回国際河川シンポジウム報告 (9/26-29:豪ブリスベン開催)

2011 年 10 月 3 日 (月)

島根大学汽水域研究センター協力研究員

都筑良明 (JRRN 会員)

2011 年 9 月 26 日 (月) ~ 29 日 (木) の 4 日間、ブリスベン (オーストラリア) で第 14 回国際河川シンポジウム(International RiverSymposium)が開催されました。今年は、日本からは唯一の参加者だったようですので、河川工学等を主要分野とされている方々には僭越な感じかもしれませんが、今年の概要等を報告させていただきます。昨年、日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN) の和田様が国際河川シンポジウムの全体概要を報告されていますので (2010 年 10 月 22 日: <http://www.a-rr.net/jp/info/letter/publication/2415.html>)、気が付いた点を中心に簡潔に報告します。

今年のシンポジウムのテーマは「川の価値 (Values of rivers)」と定められ、河川の経済的価値、社会学的考察をテーマとしたセッションが数多く設定されるとともに、Indigenous people (いわゆるアボリジニと呼ばれるヨーロッパからの移民以前からオーストラリアに在住していた民族) で構成される First peoples water engagement council が結成されたこと等のオーストラリアのコミュニティ参加の流れを背景としてのことと思われませんが、コミュニティ参加が Indigenous people の方々を尊重するという視点を中心に議論が行われていました。日本でも、環境の分野において、一般市民の参加が課題とされてきた部分があり、地域レベルの一般市民が参加する様々な会議等が開催されてきたと思います。社会システムの相違点はあると思いますが、このような分野でも日本の経験を活用していただける可能性もあると思われれます。河川工学、経済学、社会学、市民参加等の多様な分野で、河川に関わり、活動を行われている方々が参加し、相互に情報交換、意見交換等を行う場として、広く活用していくことができれば、日豪のお互いの発展に寄与するのではないかと考えています。アジア太平洋地域の先進国である日豪がこのような場で協力していくことは、この地域の途上国の発展に大きく寄与することになるでしょう。日本の近隣諸国からの参加としては、豪中環境開発パートナーシップの枠組みに関連して、同パートナーシップのセッションが設けられるなど、中国からは 20 人程度の参加者がおられました。この点については、主催者側の International RiverFoundation, International Water Centre の方々と話をしたときに、日本からの参加者が増えて欲しい、発表や RiverPrize への応募に際して、言葉の問題を含めて困難な部分があれば、是非相談してほしいと言われました。今年の International Riverprize のファイナリストはアメリカの 2 河川、オーストラリアの 1 河川でした。オーストラリアの河川からは多くの方が参加されていましたが、アメリカの 2 河川からの参加者数はそれぞれ 3 人、1 人でしたので、Riverprize に応募した場合でも少人数での参加でも大丈夫なようです。Riverprize への応募方法が変更されるという未確認情報もありましたので、応募を考えている河川の方がいらっしゃるようでしたら、主催者に直接確認していただきながら準備を進められると良いと思います。

Riverprize は高額な賞金の特徴です。International RiverFoundation から発行された River Journeys II によると、河川工学、ダム開発等を事業として行ってきた Thiess 社の創業者家族が多くの支援を行ってきたようです。土木機械のキャタピラ社、WesTrac も支援を行っているようです。1998 年に第 1 回のシンポジウムが開催され、1999 年の第 2 回シンポジウムにおいて

International Riverprize が賞金 10 万豪ドルで設けられ、2001 年の第 4 回からは National Riverprize (賞金 2 万 5 千豪ドル) が設けられました。2005 年以降、賞金総額が 20 万豪ドル、30 万豪ドル、40 万豪ドル、50 万豪ドルと年々増額され、2009 年には International Riverprize は 35 万豪ドル、National Riverprize はオーストラリア政府がスポンサーとなりました (賞金 20 万豪ドル)。International Riverprize を受賞したアジアの河川には、2002 年のメコン川 (東南アジア)、2006 年の Sha River (中国) があります。流域人口約 20 万人、2 万 7 千人の河川も受賞していますので、規模に関わりなく、環境修復、市民参加等の視点が重視されているようです。

9 月 26 日 (月) の開会式には、20 か国から 500 人の参加者がブリスベンのコンベンションセンターに集まり、オーストラリア連邦 (Commonwealth) の環境水ホルダー (Environmental Water Holder, 2007 年連邦水法に基づき設置された。環境水に関する権威保有者とでも訳されるでしょうか) の Ian Robinson 氏により開会が宣言され、アボリジニの伝統的なパフォーマンスによる開会セレモニーが行われました。開会セレモニーでは、2 人のオランダ人によるキーノートスピーチが行われ、伝統的に洪水対策に力を入れてきた経験を、最近のクイーンズランドの洪水の経験に関連付けたスピーチが行われました。

開会式に先立つ 9 月 25 日 (日) には、ブリスベンの中心市街地のモール (前日歩行者天国形式の商店街) の特設ステージで、一般市民向けのプログラムが開催され、専門家のスピーチ、学生の発表、Indigenous people の楽器の演奏、カントリー音楽の演奏により、モールの一般市民向けに International RiverSymposium を宣伝する試みも行われました。

最終日の午前中には、恒例の The Great River Debate において、The solution to flood management is better engineering. (洪水管理の解決方法は、工学的方法に求めるべきなのか) というテーマによる議論が行われました。

ここ数年のプログラムを見ると、河川工学から、経済学、社会学、市民参加等のテーマまで幅広く、学術的な発表から、自治体や水機構のような団体の実務者による発表、環境 NGO による発表まで幅広いのが 1 つの特徴になっているようです。

拙論では大和川で 2005 年から行われている家庭で行うことができるソフトな対策の社会実験をテーマに、経済的な側面の考察を加えるなどの内容で発表を行ってきました。オーストラリアでは Healthy Waterway というコミュニティ参加のプログラムがあるのですが、Healthy Waterway は、屋内、屋外の両方の活動が対象となり、水だけでなく廃棄物も対象にしていることが特徴です。これに対して、日本のソフトな対策は 1980 年代後半から、屋内で行うことができる水質汚濁負荷排出量の削減対策を中心としてきた点が特徴で、少しずつ関心を持ってもらえるようになってきたような気がします。

International RiverSymposium は、International RiverFoundation, International Water Centre が置かれているブリスベンで長く開催されてきました。昨年の第 13 回シンポジウムが初めて開催地がパース (西オーストラリア州) に移動し、来年の第 15 回シンポジウムは 10 月にメルボルン (ビクトリア州) での開催が予定されています。これまでの International RiverSymposium のプログラム、発表スライド等は、International RiverSymposium のホームページ (<http://www.riversymposium.com>) で閲覧可能です。

以上